

雲仙市大塚小学校 研究の概要

I 研究の構想

1 本校児童の実態



「特別の教科 道徳」を中心とした
「主体的・対話的で深い学び」

- ・明るく、素直である。
- ・自らの学びや経験、見通しをもとに、物事を判断し、行動する力が乏しい。



素直な学習者を
主体的な学習者に！

2 研究構想図

本研究で目指す児童像

- ①物事を自分事として捉え、主体的に学ぶことができる児童
- ②自分の思いや考えを伝え合い認め合うことができる児童
- ③自分で判断し、よりよい生き方へとつなげることができる児童

研究主題

自己をみつめ 互いに考えを深め合い
よりよい生き方へと 学びの先へ踏み出す子どもの育成

研究推進委員会

授業研究部

全体会

学びその先部

授業をより磨く

- ・指導過程の見直し
- ・「めあて」の共通理解
- ・思考ツールの活用（可視化+可動化）
- ・対話的な検討会（模擬授業、ワークショップ等）
- ・子どもの変容を見取るアンケートの実施
- ・道徳科の授業の足跡を掲示

自分の意見を発信させる

- ・思いを発信する、くみ取る機会を作る
- ・各行事計画等で、子ども達の“これから”の姿などを設定し、子ども達の姿を振り返る。
- ・その先委員会…自分たちの課題を見つけて、取り組んでいく中心的存在

【調査分析】

- ◎道徳アンケートの分析・考察
- ◎学力調査等の分析・考察

【家庭学習】

- ◎家庭学習の習慣化
 - ・「家庭学習の手引き」
 - ・「学びの習慣リーフレット」の活用
- ◎基本的生活習慣の定着
 - ・「マイスケジュール」

【基礎基本の定着】

- ◎スキルタイムの充実
 - ・学力向上週間
 - ・「どう解くタイム」
- ◎「大塚っ子スタンダード」の徹底

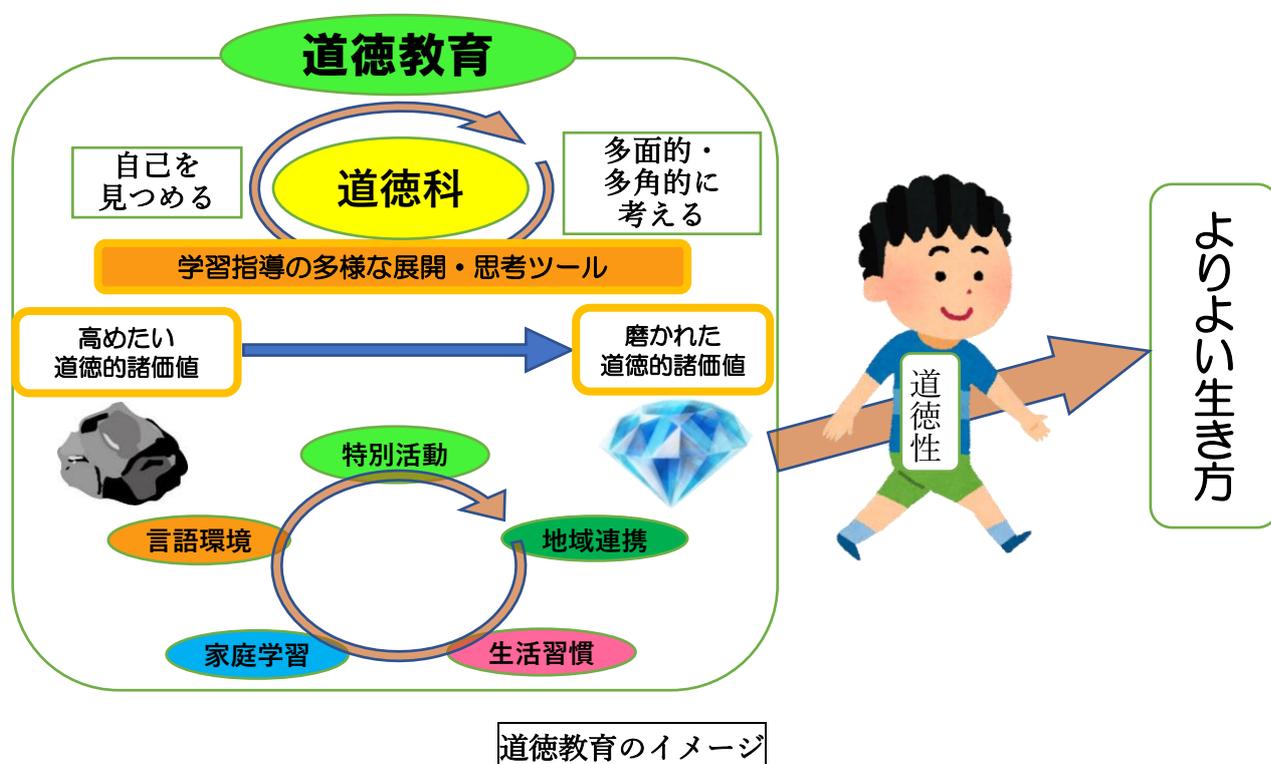
3 研究主題について

自己を見つめ 互いに考えを深め合い よりよい生き方へと 学びの先へ踏み出す子どもの育成

「自己を見つめ」とは、道徳科の授業、道徳教育を通して、ある出来事について「自分だったらどうするのか。また、なぜそうするのか。」と考え、これまでの自分の経験やその時の感じ方、考え方と照らし合わせながら、自分の内面を見つめ直すことである。

「互いに考えを深め合う」とは、他者と考えを交流する工夫を仕掛けることで、自分とは異なった視点や考えに気付かせ、議論を生み出させることである。そうすることにより、多様な価値観に触れ、多面的・多角的な物事の見方を身に付け、主体的に判断する力を育む。

そうして得た力を全ての教育活動を通してさらに培い、志や憧れをもって自らの生き方について考えを馳せ、学びのその先へと踏み出す力を身に付けさせたいと考え、主題を設定した。

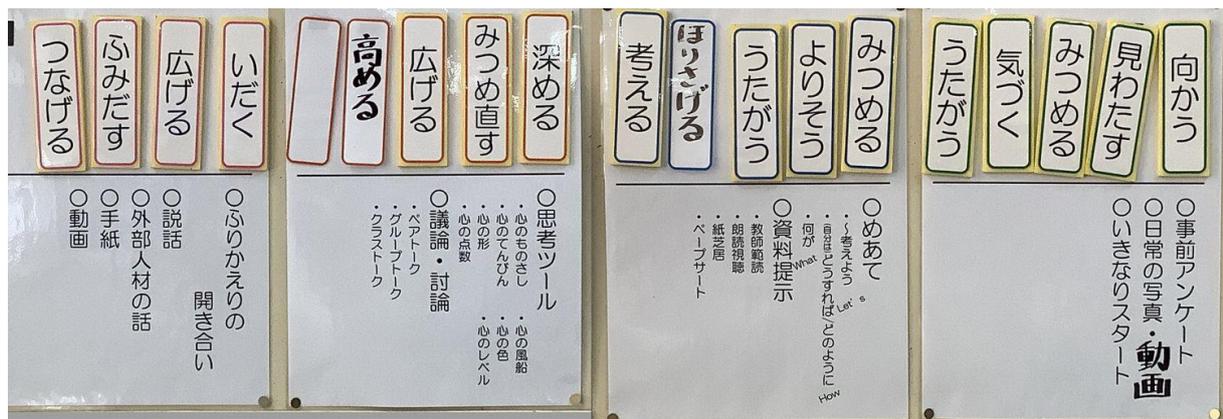


II 研究の内容

1 授業研究部 <道徳科、授業づくりについて>

(1) 柔軟性をもたせた指導過程

授業でねらう道徳性の諸様相にに応じて、児童の実態、授業者の願いや意図を授業に反映させるために、指導過程の表現に柔軟性をもたせた。これは、日々の授業改善から生まれた取組である。「こういった指導過程にすればよいか・・・。」といった授業者の授業づくりへの迷いを軽減し、授業づくりについて全職員で共有するために、指導過程や指導方法を選び取っていくスタイルを取った。



(2) 「めあて」についての共通理解

ねらう道徳的価値についてひっきり(興味・関心、必要感)をもたせ、「○○は、なぜか考えよう。」「○○のために、何が必要か考えよう。」など、考える必然性、考えるポイントを与えるめあてを設定するようにした。

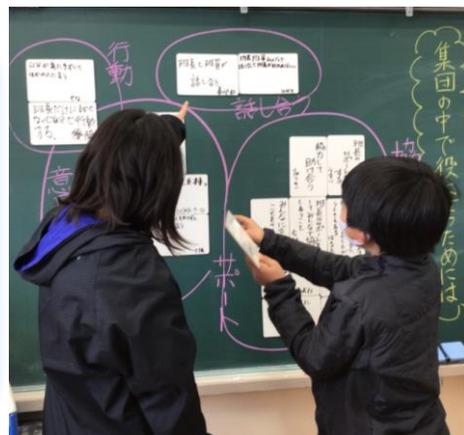
(3) 思考ツールの活用

自分の内面を見つめ、考えを深め合うためのツールであるという共通認識のもと、児童の考えを可視化する「心のものさし」「心の風船」「クラゲチャート」等の思考ツールを授業で活用してきた。可視化することにより、「自分はこう思うけど、友達はどのように思うのだろう。」と他者の考えへの関心が生まれ、議論へと発展させた。

(4) 学力向上週間の設定

毎月1週間、学力向上に向けた取組を強化する期間を設けている。木曜日には、朝のスキルタイムを有効活用した「どう解くタイム」を設定した。

これは、テーマについて自分の立場を明らかにして考えを述べ、他者との考えの違いを感じながら、表現意欲・表現力を高めるねらいがある。テーマは、日常生活のできごとをはじめ、様々な状況において判断を求める内容を用意した。



2 学びその先部 <学びのその先へ、道徳教育について>

(1) 児童の声を反映する掲示板の設置

児童が学んだことを生かし、自ら考え主体的に行動しようとする意欲を高める校内環境を目指して掲示物の工夫を行った。



きら☆スポット

学校行事と道徳科の内容項目との関連を児童に意識させるために、内容項目の言葉と行事や児童の様子が伝わる写真を掲示した。



みんなの声広場

児童が心を開いて語るきっかけづくりとして設置した。行事に関連させた内容や日頃の学校生活上の諸問題などを題材に取り上げ、児童参加型の掲示になるように工夫した。

例：降水確率50%の日に傘を持って出かける、出かけないの立場にシールを貼り、その理由を付箋に書く。
豪雨災害の写真を見て、どう思うかという問いに、考えて付箋に書いて貼る。



学びの広場

上学年への憧れや教育活動への見通しをもたせたり、他学年の学習の様子を知り、学びへの意欲を高めたりするため、学校行事や各学年の校外学習、学習成果物などを掲示し（必要に応じて解説やメッセージ欄を付け）、児童同士の情報交換の場を設置した。

(2) 「ことばの木」の設置

本校児童の実態として、語彙力が低いことが挙げられる。児童の語彙力向上の手立ての一つとして設置した。国語の教科書に掲載されている「ことばの木」を参考にし、多くの言葉に触れることができるように工夫した。また、スクールサポーターの協力も得ながら、季節や行事等に関連する図書の紹介や言葉遊びも掲示している。



(3) 主体性を促す生徒指導

子どもの自己肯定感を向上させ、前向きに学校生活を送るため、「～しない」、「～はだめだ」等の禁止事項による生徒指導ではなく、「今どうすればいい?」、「～しよう」等、子どもが主体的に判断し、行動していくための生徒指導を全職員で共通理解し、実践した。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

(1) 思考ツールの有効性

思考ツールを活用することで、表出されにくかった考えを可視化することができた。他者との微妙な考えの差異にも目を向けることができた。また、可動する工夫もし、比較・分類・統合化を図ることもでき、自分の考えを見つめ直し、考えを深める機会となった。

(2) 表現意欲の向上

「どう解くタイム」など、自分の考えを述べ、他者の考えを聞く機会を積極的に設けたことにより、表現意欲が向上した。これは道徳アンケートの結果にも表れており、道徳科に対する意欲の向上に役立った。

(3) 校内掲示板の有効活用

「きら☆すぽっと」において、年間の活動の様子を予め示しておくことで、活動への関心を高め、見通しをもって取り組むことができるようになった。また、「みんなの声広場」で掲示したものを集約して掲示することは、振り返りの場としても有効であった。

(4) ことばの木

児童が主体的に語彙を獲得していくために、「反対の言葉」や「気持ちを表す言葉」などテーマを決めて、自分たちで葉や実に言葉を書いて貼り、木を完成させていく活動を行った。子どもは、楽しみながら様々な言葉に親しむことができた。

(5) マイスケジュール

各自の事情に合わせて生活の計画を立て、より健康的な生活習慣の定着を目指している。「計画通りに、主体的に自分でできた」という児童が、昨年度は40%から60%に上昇し、本年度は66%（10月時点）となっている。徐々に好転しており、就寝時間や学習時間の確保にもつながっている。

(6) 全職員での授業づくり

職員室内に、指導過程や指導方法について話し合えるスペースを設けたことにより、授業パターンや思考ツールのアイデア・発問など、職員同士で相談・共有しながら児童の実態や授業者の思いを反映させる授業づくりができた。

(7) 評価と改善

「道徳科における児童の学習状況及び成長の様子についての評価」、「道徳科の授業に対する評価」、「道徳教育における評価」について、教職員で共通理解し研修を重ねることを通して、道徳科、道徳教育における「評価-改善-計画-実践」のサイクルを確立することができた。

また、教師一人一人が確かな授業実践のもと、自分を磨き、子どもをその先へと踏み出させるための言葉を紡ぎ、働きかけを行っていくための基礎を築くことができた。

2 課題

(1) 自分事として考える時間の確保

学びのその先へと踏み出させるために、教材から離れ、自分事として考える時間を確保しなければならないのだが、時間配分が難しい。議論する時間も確保するために、授業前半の時間を短縮する手立てが必要である。

(2) 議論の仕組み方

授業の中で、どのような意図で、どのような形で議論を仕組むか、検討しなければならない。同じ立場同士での話し合い、違う立場同士での話し合いなど、パートークやグループ協議の設定の仕方について、今後も深めていく必要がある。

(3) 学びを「その先」につなげる振り返り

「道徳科で学んだこと、考えたことを実生活で生かしていこう。」、「これからはこうありたい。」と、自分の生き方に憧れをもったり、肯定的に考えたりすることができる振り返りを確保しなければならない。

(4) 意識の低い児童への手立て

学校全体の94%の児童が、「みんなの声広場」などの掲示物に関心をもっている。残り6%の児童の表現力と語彙力を向上させるために、掲示物を「学級活動」や「どう解くタイム」、「国語タイム」などで活用する必要がある。

(5) 持続可能な取組

掲示物による道徳教育は、この2年間で成果が出始めたところである。主体的な児童へ変容させるための取組は、持続可能な組織を確立し、改善を図っていくことで、今後とも継続していかなければならない。